

407) 潮騒

夕焼けが頬を照らして  
週末のドライブコースに  
ホテルまでもうひと走り  
あかあかと一番星が

海風がちょっと冷たい  
洲の岬の燈が見える  
まっすぐな道の向こうに  
ぼくたちを見まもっている

夜を招く星の輝き  
だんだんと数をふやして  
テラスには海が轟き  
謎めいたふたりの夜は

満天を埋め尽くすほど  
はるかなる光を放つ  
潮風が肌をうるおす  
ゆっくりとまわりはじめた

さえわたる星屑だけが  
潮騒の海の向こうに  
晩秋の夜にとけこむ  
くだけ散る波のごとくに

かすかなる明かりとなって  
まっ黒な闇がひろがる  
ぼくたちの愛の時間は  
おしよせてひとつになった

夢のなか彷徨うように  
くりかえす海の響が  
潮騒の調べのなかで  
すぎてゆくこのひとときを

まどろんでわれにかえれば  
懐かしい歌を奏でる  
倖せに包まれながら  
いつまでの忘れはしない

夜が明けて日の出前  
生命あるよろこびを

穏やかな海になる  
人々に教えるように

→